

Semiosurvival in Cognitive Set Theory:
Incarnation of Love for an Individual

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 林太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1545

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



認知集合論における記号生存

— 個体愛の受肉 —

Semiosurvival in Cognitive Set Theory

Incarnation of Love for an Individual

高山 林太郎

TAKAYAMA, Rintaro

1. はじめに—本稿の目的

本稿では高山（2020, 2021）を受けて「認知集合論」の中に「記号生存」を位置付けた上で、高山（2010, 2018b）を受けて八丈方言や東京方言などに見られる「皆」の「ミ」の中央寄り母音が上代特殊仮名遣イ列乙類母音の「音韻生存」である可能性を論ずる。

2. 個体愛の受肉としての記号生存

高山（2020）では「情動的記憶」という医学用語を用いて記号生存の説明を実施したが、本節では認知集合論の枠組みの中に記号生存を位置付ける説明を追加する。これは高山（2020）の説明と両立するもので、過去の説明を修正する必要は無い。

そもそも認知集合論の目標は、その枠組みの中で定義できるものは定義しようとするものである。例えば「真善美、喜怒哀楽」のような抽象的で漠然とした概念の定義は困難だという意見があるかもしれないが、科学哲学では反証可能性が科学の条件として挙げられる。定義することで反証可能になるので、反

証されることを覚悟の上で定義したほうが学問的である。もし定義に瑕疵が見つければ、その都度修正すればよい。

定義するというのは、より基本的な概念を用いて、より高度な概念を説明するということである。何がより基本的であるかということも含めて探っていくものだから、ある時点まで基本的だと思われていたものが、さらに基本的な概念へと分解されるということも起こりうるが、それは定義の修正であり進歩でもある。

このような哲学上の考え方を「定義主義」と呼ぶことができる。数学の概念が厳密に定義されることについて異論は無いだろうが、ここで言うのは、我々が日常的に使っている基本的な概念についてもできるだけ数学のように定義したいということである。プロトタイプカテゴリーの考え方からすると「全ての x は P である」を満たすカテゴリーは非常に稀であり、カテゴリーを一意に定義するそのような命題は中々現実には存在しないということだが、物理学でよくやる「近似」をやればいい。カテゴリーは必要に応じて古典的カ

キーワード：認知集合論、記号生存、上代特殊仮名遣、音韻生存

Keywords : cognitive set theory, semiosurvival, jodaitokushukanazukai, phonosurvival

テゴリーへと近似されるので、定義して議論してよい。

美醜というのは典型的かつ基本的には生物としてのヒトが配偶者や子供や親族や同族を見る際に感じる本能的な魅力・反魅力のことではないかと思われる。他方で、桜の花が美しいとか数式が美しいとか述べることもあるが、これは擬人化や心理学的投影が関係している。また、女性的な美しさ（綺麗、可愛い等）や男性的な美しさ（カッコイイ、イケメン等）だけでなく、子供の可愛さも魅力の一種である。子供の可愛さは美しさとは呼ばないが美点ではあるので、ここでは美に含める。

所有集合という用語をここで導入する。所有集合の要素には管理権または支配権がある。ここで言う管理や支配は最大限に広義で、その度合いに応じてプロトタイプカテゴリーが形成される。例えば法的な配偶者間では互いに独占し合うが、お見合いパーティーの参加者は次々と対話する相手を替える。魅力があるものは所有集合に許容され、反魅力があるものは所有集合から排除される。真偽、善悪についても美醜と同様である。真なる情報は所有集合に許容され、偽なる情報は排除される。なお情報とは命題（事態を表す文）の確からしさが判断されたものを指す。真偽不明の情報は暫定的に所有される。人間は自分からは平気で嘘をついても、人から嘘をつかれたら不愉快になるものだ。現実主義者（リアリスト）の感性は、偽または真偽不明の情報を許容しがたい。善なる行為・存在は所有集合に許容され、悪なる行為・存在は排除される。真偽、善悪、美醜は順に信頼、正義、感情に関する魅力・反魅力であると考えられる。

原則としては、メリット・デメリットのように、魅力・反魅力をポイント制で計算して、

魅力が上回れば所有集合に許容し、反魅力が上回れば排除する。何がどういふポイントを持つかは個人差があると考えられるが、原則は共通する。例えば犯罪は、罪悪感や、逮捕された時の刑罰等を考えれば反魅力が大きい。今非常に空腹で、何か食べないと危険だとなると、お金が無ければ、万引きせざるをえないことも人や地域によってはありうる。食べ物には大きな魅力があるので、食べ物の魅力と犯罪の反魅力を比較して上回っているほうを取る。なお精神病の一種のクレプトマニア（盗癖）は、窃盗自体に魅力を感じる例外的な感性である。

快・不快との関係は、快・不快は即時的だが、魅力・反魅力は即時的でも将来的でもよい。例えば食べ物には魅力があるが、食べなければ食欲を満たさないの、店舗で購入して冷蔵庫に入れるだけではまだ充分ではない。魅力・反魅力とは現在または未来の快・不快である。刑務所から出所して中々仕事に就けない元受刑者は、過去ではなく、未来の犯罪への危惧で排除されている。愛情・憎悪との関係は、愛するとは魅力あるものを所有集合に許容しようとすることであり、憎むとは反魅力あるものを所有集合から排除しようとするのである。

愛憎は、対象が個体か概念かで区別され、個体愛、概念愛、個体憎、概念憎がそれぞれ成立する。憎悪についてはここでは詳論しない。個体愛と概念愛の違いは、概念愛は交換可能なものに対する愛だが、個体愛は交換不能のものに対する愛である（個体愛に対応する医学用語は「愛着」か）。従って交換し易さによって極端な個体愛から極端な概念愛までのスペクトラムが存在することになるが、単純化の為に、ここでは二項対立で論ずる。

個体愛の典型は家族や親族、親友に対するものだが、お気に入りのカップなどの物品も個体愛の対象となる。概念愛の典型は好きな飲食料品に対するもの（食欲）で、飲食料品や消耗品は本質的に交換不可避（交換可能の最上位）である。

人間の中には個体愛が常人より広く適用される感性の持ち主がいて、消耗品として見せない物品の範囲が広く、皿やフライパンを永く大事にし、割れた茶碗や割れた鏡を捨てる勇気が出ず、消費や交換という行為自体に罪悪感を感じやすく、職場の同僚一人一人に至るまで大事にし、その結果として多くの人から愛される。逆に、個体愛が常人より狭く適用される感性の持ち主もいるが、これはサイコパス（共感性の欠如）とは異なり、家族などの極狭い範囲に対しては一定の共感が働くが、その範囲を出ると共感が急激に弱まる。これは共感が愛の経路でのみ伝わるからである。

他方で、概念愛が常人より強く適用される感性の持ち主がいて、これの人間に対するものを人類愛や利他精神などと呼ぶが、これは無差別であるがゆえに無責任でもあり、責任を取る愛というのは個体愛のほうである。逆に、概念愛が常人より弱く適用される感性の持ち主もいるが、その場合、個体愛の範囲の広いと狭いとにかかわらず、その範囲を出ると概念愛が弱いため無関心になり、身内・仲間内・知り合いさえ良ければ他は心底どうでもいいというスタンスに近くなる。なお、キリスト教で言う「神の愛、普遍的な愛」というのは（人類に対する概念愛ではなく）父なる神から人間への個体愛が全信徒に向けられ大家族をなすもので、人間は持ち得ない。

更に、個体愛が常人より弱く適用される感

性の持ち主もいる。個体愛は範囲の広・狭には個人差があるものの通常は強いものだが、稀に弱い場合があり、倫理的に非難されがちである。ここで通常の結婚のことを考えてみると、最初は性愛によって強く結びついても、徐々に性的魅力は互いに失われる。慣れや飽き、加齢が原因として考えられる。しかし共に過ごすことで家族としての信頼関係（絆）が醸成される。なお信頼関係の維持に失敗する場合もあるが、論旨から逸れる。ところが、個体愛が薄弱だと、人間も交換可能だという判断が働きがちで、頻繁な乗り換えや不倫や乱交が起こる。例えば、独身貴族と呼ばれる裕福な男性で、結婚せず複数の若く美しい女性達と同時に付き合い、飽きたら次々と乗り換えて行くようなケースでは、個体愛が薄弱なのかもしれない。自分の両親や兄弟は否応なしに共有する時間が長いため流石に絆が育まれても、パートナーとなると新参者であるため絆が醸成されず、結果として乗り換えが止まらない。サイコパス（共感性の欠如）だと自分だけが人間で他者なんて等しく無価値だから交換・消費可能だという感覚になると考えられるが、個体愛が薄弱な場合というのはそこまで極端ではなく、絆の醸成に非常に長い時間がかかる程度であると考えられる。

さて、喪失感（悲しみ）は喪失の後で発生するので耐え難く、一見して生存に不利に見えるが、別の新たな喪失を恐怖し自発的に防止させるという意味では進化論的にも理に適っている。悲しみは個体愛に働くものだが、種族全体（いわゆる外延）の喪失などが起こる場合には一見して概念愛にも働くように見える。例えば蛍の住む川を復活させる運動などが挙げられる。しかしこれは上位概念と下位概念の関係が概念と個体の関係からの類推

で成り立つ為に起きる現象と考えられ、個体愛の亜種と見る。

ここで改めて所有集合について論ずる。個体は所有できるが概念は所有できない。個体愛や概念愛は所有集合へ個体を許容させる。所有集合の要素には管理権や支配権があり、管理や支配は最大限に広義である。個体愛が強く働くと、交換不能なので、所有集合からの排除が困難になる。所有集合は、交換可能な要素を周辺メンバーとし、交換不能な要素を中心メンバーとする。概念愛も個体を所有させるが、周辺メンバーなので、消費や排除も容易く実行される。損は悲しみと、得は喜びと地続きで、それぞれ同じもののスペクトラムをなす。概念愛なら損で済むが、個体愛だと悲しみに至る。損とは、所有集合の要素から排除されたくないものが排除されることである。悲しみとは、個体愛の対象である所有集合の要素を損ずることである。得とは、所有集合の要素に許容したいものが許容されることである。喜び・嬉しさとは、愛の対象であるものが所有集合の要素として得られることである。なお「喜び・嬉しさ」は個体愛にも概念愛にも使われるが、「悲しみ」は原則個体愛にのみ用いられる（個人差がある）。怒りとは、愛の対象であるものが所有集合の要素として得られないことや、憎の対象である所有集合の要素が排除されないことである。楽しさ・幸せとは、愛の対象であるものが所有集合の要素として得られていること（順に存続・完了）である。

以下で、「個体愛の受肉」という現象について述べる。例えばアイドルのグッズを買い漁るファンは、特定のアイドルという個体を所有したい（つまり結ばれたい）が叶わないため代わりにグッズを所有することで喜びを得

る（これは疑似恋愛と呼ばれる）。個体愛の対象は交換不能であるがゆえに、再現され切ることはないが、概念愛の対象は交換可能なので概ね再現される。例えば食材にも品質や味の問題があるので、常に概念愛を満たす訳ではないが殆ど常に満たす。他方で「個体愛の受肉」と言う時は、決して再現し切らないことが前提となる。事情により所有できないか、既に失われたか、これから失われる場合が考えられる。本論における受肉とは、再現しようとしても再現され切らないことである（例：AIでよみがえる美空ひばり）。

人物の銅像が生前に建てられる場合、周囲の人間が主導する場合と、本人が主導する場合があるが、後者は自己への個体愛（つまり自己愛）の受肉の側面が強い。死後に計画され建てられる場合は純粹に他者への個体愛の受肉となる。世界各地に大小のイエスキリスト像が建てられ同絵画が描かれているが、これも個体愛の受肉である。イエスキリストが再臨するという信仰自体も個体愛の受肉ないし再現への希望である。

なお「概念愛の受肉」も存在する。例えば、食品は腐敗し展示に向かない（「事情により所有しにくい」）ので、恒常的に展示すべく食品サンプルが開発された。絶滅動物の展示物は（生体が）「既に失われた」場合で、代替肉は（本物が）「事情により所有しにくくなる」場合で、ガンマニアにとってのトイガンは（本物が）「事情により所有できない」場合である。ちなみにガンマニアが本物の拳銃を入手する場合も、人がスーパーで飲食物品を購入する場合も、「概念愛の再現」である。

自分の子供というのは自分の延長線上にある。子を守る為に献身的になるばかりか自己犠牲的にもなる親が決して少なくないのは進

化論の要請ではないかと考えられる。これは可愛いという感情と関係があるが、「自分が可愛い」という言い方もある。他方で、不倫の子で自分と血縁関係が無いと判明した時に愛が冷める父親がいる（既に絆が醸成されていて愛が冷めない場合もある）。つまり人間はただの子供ではなく自分の子供（場合により養子も可）が欲しい。自分という個体は既に存在していて、自分を寿命などの終焉から超越させて未来に遺す為に、子供を儲け育てる。だから望まれて生まれて来る子供は個体愛の受肉である（勿論、生物学的機構によるので、望まれずに生まれる場合や、次の次の世代が望めない場合もあるが、論旨から逸れる）。子供に自分が実現できなかった夢に向かって挑戦させる親がいるが、これは典型的な自分の延長としての子供である。程度の差はあれ、子供は親の延長と見なされ、だからこそ愛される。

さて、言語変化の方法は音声・音韻、意味、語彙、文法など多岐に渡るが、これらを纏めて言語変化関数と呼んでおく。外国語や他方言からの影響は捨象する。親世代の言語を親言語、子世代の言語を子言語とすると、親言語を言語変化関数に通したものが子言語となる。一定確率で何らかの変化が起こり、親言語と子言語には差異が生じる。親世代は子世代に同一言語の獲得（つまり再現）を求めるが（例えば「ら抜き言葉」への批判）、それは決して叶わないので、現象として個体愛（自己愛）の受肉である。

ハ行子音は奈良時代より更に遡れば/p/だが、室町時代には/f/（但し唇は噛まない）で、現代は/h/である。他方で、促音直後（例：出っ歯/deQpa/）やオノマトベ（例：パタパタ（はためく）、ピカピカ（光る））では/p/のまま

残る。前者は音韻条件なので説明は充分だが、後者は意味条件なので更なる説明を要する。この点に答えるのが「音韻生存、記号生存」という概念だった。音韻生存の場合、強調形（オノマトベを含む）に限り古い音韻が生存する場合があると説明する。何故強調形は音変化の例外となるのか。全てのハ行子音が/p/である状態から、一部が/f/で残りが/h/である状態へと変化する際に、意味的に強調されているオノマトベで/p/が維持されたのは、「乳幼児期に親が子に強調形を多用して分かり易く教え込み、脳が非常に柔軟である子がそれを情動的に記憶するから」とであると考える。ここで「教え込む」と言った部分が「個体愛（自己愛）を受肉させる」に相当する。つまり音韻生存には送り出す親の側の「強調形を交えた教え込み」と受け取る子の側の「情動的記憶」の両者が関わっていると考えられる。教えたいものは人間として生きて行く為の知恵だが、その伝授は言語を通してのみ可能で、単語を一つ一つ教えて行くので、個体愛の対象はまさに個別の単語や強調形に至る。

オノマトベの/p/の場合は該当する語彙が相当数存在していて、外延の規模は大きい。他方で、筆者が研究している「皆」（ミナ、ミンナ、ミナサン等）の「ミ」の中央寄り母音の音韻生存は語根の例が1つしかなく（厳密には少なくとも1つであり、他の例が見つからない保証は無いが、他の例の存在を証明する必要も無い）、「1例しかない語根にだけ存在する母音などありうるのか」と疑問が生じる。しかし本論を踏まえれば、乳幼児期に親が子に教え込むのは個別の強調形なので、親の発話に高頻度なら可能と見る。

「皆」が意味的に強調されている点を確認しておく。高山（2021）で述べたように、或

る命題を満たす全ての要素からなる全体集合は既数集合と未数集合の和集合だが、信頼性があるのは観測されている既数集合の要素だけで、観測されていない未数集合の要素には信憑性しかない。つまり「皆」が表す集合の母数が一定以上大きくなると、ほとんど未観測であっても命題が真実であると「強調」（強弁）せざるを得なくなる。

3. 上代特殊仮名遣ミ乙類の音韻生存か

高山（2017）は複合動詞の2単位形や前部要素に下がり目のあるアクセントの音韻生存を、高山（2018a）は院政期の遅上がり低起式の音韻生存とそれによる挿入拍の発生を、高山（2018c）は間投音におけるふるえ音・吸着音の記号生存とふるえ音に由来する可能性のある音声の音韻生存を指摘した。本節以降は上代特殊仮名遣のイ列乙類母音*/ɪ/が語根「皆」で八丈方言と東京方言において音韻生存した可能性が考えられる形/ɪ/を指摘する。これは共時的には/ɪ/[ɪ]であっても通時的には*/ɪ/に遡ると考えるので、共時的な記述としては不正確でも読み易さを優先して/ɪ/などと表示することがあるが、勿論正しくは/ɪ/[ɪ]であり、便宜的な一種の省略表記である。共時的には/ɪ/[ɪ]は確かに/ɪ/[i]の異音の一種だが、特定の語彙という環境に従って出現する点では条件異音であり、その音色の歪みが大きな標準偏差（振れ幅）を伴って変動する点では自由異音である。

上代特殊仮名遣とは、奈良時代以前の、キヒミケヘメコソトノモヨロの音節とその濁音の音節における甲類と乙類の万葉仮名の書き分けで（モは古事記のみ）、発音の区別を反映する（八丈・東京でも甲類に合流したと見てよい）。その音価には様々な推定があるが、

本稿はそこには立ち入らず、推定音価の一例のみ次に示す：イ列甲類[kʲi, pʲi, mʲi]（例：水な [mʲina]）、イ列乙類 [ki, pi, mi]（例：皆 [mina]）、エ列甲類 [kʲe, pʲe, mʲe]（例：女 [mʲe]）、エ列乙類 [kɛ, pɛ, mɛ]（例：目 [mɛ]）、オ列甲類 [ko, ɬo, to, no, mo, jo, ro]（例：疾し [toɬi]）、オ列乙類 [kə, ɬə, tə, nə, mə, jə, rə]（例：年 [təɬi]）。何故推定音価の詳細に立ち入らないか説明する。左記ではイ列の甲乙の違いは主に母音の違いだが、主に子音の違いという説もある。しかしながら第一に、上代語には録音が無いので詳細を確定できない。第二に、仮に現在有力な説があっても、それは上代中央方言の説であり、飛鳥・奈良時代より前や、他の方言でどうだったかは未詳である。実際、上代東国方言ではイ列とエ列の甲乙の書き分けは無く、オ列の甲乙の書き分けはあった。つまり方言によって変化の段階、速度、母音の音色など、多様性があったと考えられ、本稿で扱う八丈方言・東京方言は東国方言を基層とする。

4. 八丈方言の母音の音響分析

2018年4月29日から5月6日まで八丈島を訪れ20名調査した（表1；姓名の公開に同意あり）。各地区の位置関係は高山（2014: e2）の地図に詳しい。主たる調査内容は音響・統計分析による母音多角形の描画だが、その他の点も調査した（高山2018b, 2018c, 2020）。表1の話者に対して「ミンナ」の「ミ」の発音を調査した。例文は「ちーとはきとーか？ みんなきたら！」（反論する強調の文脈；/ɪ+）、「これいあにーてよもか？ ミンナだら。」（漢字「皆」を読むだけの文脈；/ɪ-）、「ミンだら」（中国の古代王朝の明；/ɪ/）、「メンだら」（麵；/e/）、「マンだら」（万；/a/）、「モンだら」

(門 ; /o)、「ムンだら」(調査時の韓国大統領の文在寅の文 ; /u) を用いた。音環境の一致を重視し、意味は特に選ばなかった。例文の実際の言い回しは各話者に適切なものを教えていただき用いた。簡単に述べると、「か」は省略可能である。「きとーか」は地区により「きたーか、きとあか」など、「きたら」は「きたらよー、きとーじゃん、おじゃらら」など、「あにーて」は地区により「あんで」と、「だら」は「だらよー」などとなる。なお、音響分析に支障が出るような言い回しの変更は、たとえ方言としては正しくても採用しなかった。

音響分析にはpraatとエクセル統計を用いた(有意水準は $P < 0.05$)。図1では母音の第1、第2ホルマント周波数の平均値を各点で

示しているが、データの散らばり具合は、標準偏差を平均値に対してプラスまたはマイナスで加算した数値の幅が振れ幅の目安で、データの約68%がその範囲に収まる。これを図示したものを「標準偏差のエラーバー」と言い、各点に付属する十字がそれである(以下同様)。なお⑨のみ各計測点mを単純に平均した場合の表示であり、nとはトークンが異なる。これは得られたトークンが少なかった為であるが、分析に支障は無い。⑨⑩⑪⑫はいずれも/l+/が単純に/e/とほぼ等しくなる話者として掲出している。耳で聞いて差を感じない話者は分析していない。差を感じた場合に分析し、母音に差が出た場合を示す。聴覚印象で区別を感じたが母音に差が出ないケースもあり、子音の違いと見られるが、本

表1 八丈島調査(2018年ゴールデンウィーク)話者情報

番	日程	姓名	y/m/d生れ	齢	地域	地区	外住等	/l/	図1
01	4/29	匿名女性	1960/7/16	57	坂下	三根	東京	=/l/	
02	4/29	匿名女性	1932/12/14	85	坂下	三根	東京	/l+, e/	⑨
03	4/29	浅沼省史	1941/5/26	76	坂下	三根		=/l/	
04	4/30	匿名男性	1955/2/15	63	坂下	三根		=/l/	
05	4/30	匿名女性	1953/3/6	65	坂下	三根		/l+, e/	⑩
06	4/30	奥山みや	1929/12/30	88	青ヶ島		東京	/l+, e/	⑫
07	5/01	匿名男性	1938/4/17	80	坂上	檜立	東京	/l+/[i]	⑥
08	5/01	米良真幸	1950/7/10	67	坂上	中之郷		=/l/	
09	5/01	米良明子	1950/8/31	67	坂上	檜立		=/l/	
10	5/02	匿名女性	1936/5/4	81	坂下	大賀郷	末吉	=/l/	
11	5/02	浅沼道一	1942/7/31	75	坂上	末吉		/l/[i]	①
12	5/02	福田栄子	1939/4/19	79	坂上	中之郷		=/l/	
13	5/02	匿名女性	1936/7/7	81	坂上	檜立	東京	/l+/[i]	⑤
14	5/04	持丸のり子	1947/8/1	70	坂下	三根		=/l/	
15	5/04	田代清	1938/3/11	80	坂下	三根		/l+, e/	⑪
16	5/04	篠崎美子	1945/3/28	73	坂上	檜立		/l+/[i]	④
17	5/04	浅沼康子	1961/8/7	56	小島	鳥打	三根	/l+/[i]	③
18	5/05	菊池政代	1934/3/15	84	坂上	中之郷		/l/[i]	⑦
19	5/05	匿名女性	1948/-/-	69	坂下	大賀郷	東京	/l+/[i]	⑧
20	5/06	持丸ミチエ	1927/10/27	90	坂下	三根	小島	/l/[i]	②

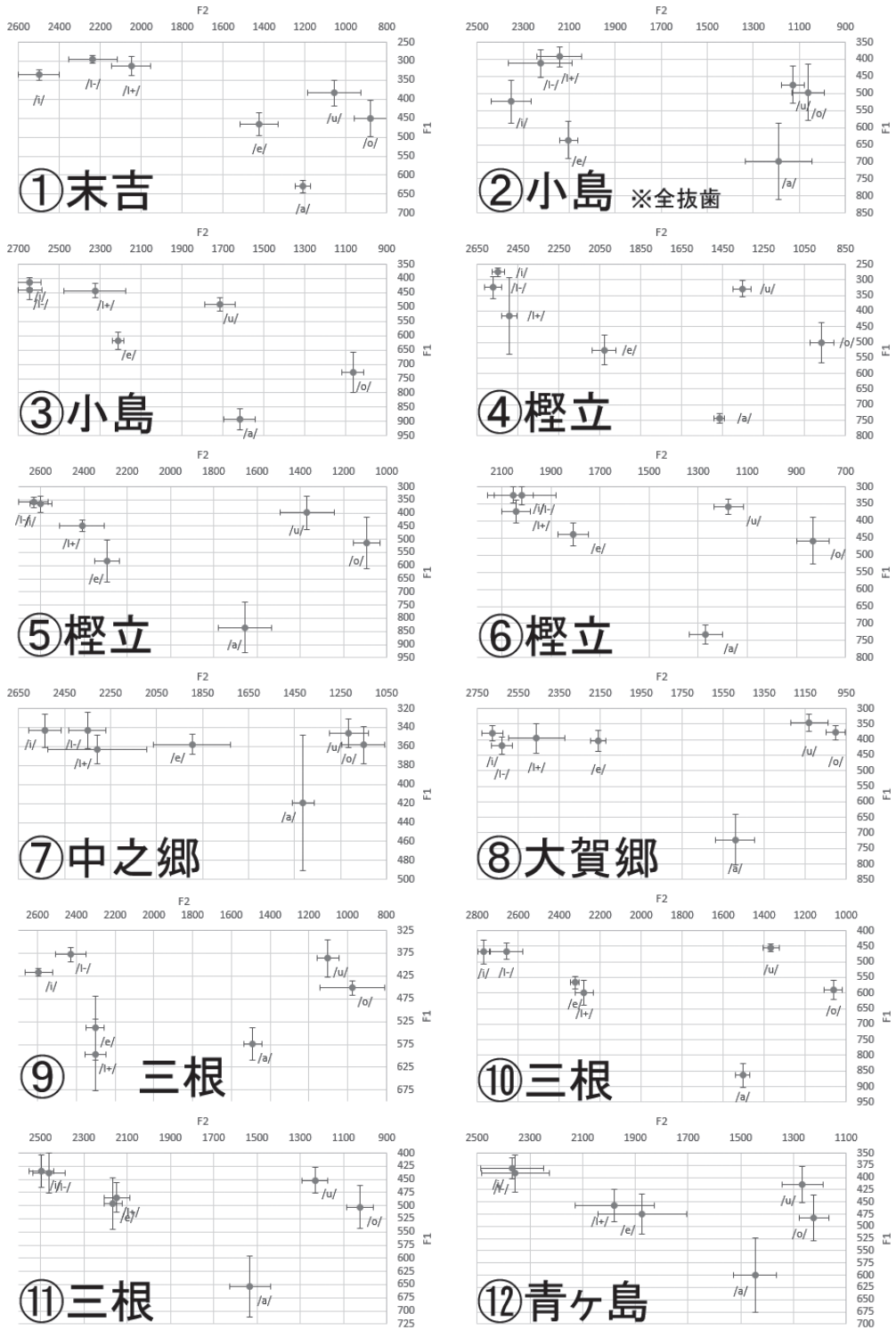


図1 八丈方言話者12名の「皆」のミの母音の音価

研究では扱わない。

「ミンナ」の「ミ」は、①坂上末吉 1 名、②坂下三根（父親は小島）1 名では /ɪ/, i/ 共に中舌母音 [i] で、/ɪ-/ より /ɪ+/- の方が更に中舌に寄っていた（これは音韻生存した強調形としてのバラ言語的な性質と考えられ、他の話者にも同様の現象が見られる場合があるが、以下一々言及していない）。③小島鳥打 1 名では /ɪ+/- が中舌母音 [i] で /ɪ-, i/ は前舌母音 [i] だった。④⑤⑥坂上壺立 3 名、⑦坂上中之郷 1 名、⑧坂下大賀郷 1 名では /ɪ+/- がゆるみ母音 [ɪ] で /ɪ/- は前舌母音 [i] だった。⑨⑩⑪坂下三根 3 名、⑫青ヶ島 1 名では /ɪ+/-, e/ は半狭母音 [e] で /ɪ-, i/ は狭母音 [i] だったが、これは /ɪ+/- が /e/ に合流したと見られる（以上、表 1 の「/ɪ/, 図 1」と図 1）。残りの 8 名に同様の現象は見られなかった。以上のことから、* /ɪ/ が坂下三根・青ヶ島を除く八丈方言で音韻生存している可能性がある（ただし小島宇津木は未調査）。②小島の話者は混血で、父親が小島出身だが出身地区は不明である。③小島鳥打の話者は純血だが小学校 1 年生の時に八丈島に集団移住している。

なお本分析の問題点として「/ɪ/ 以外の母音で強調の文脈が未調査」という点が指摘されたことがある。確かに厳密には調査すべきだが、他の母音を耳で聞いても同様の音色の歪みは生じていない。いずれ機会があれば再調査等を実施したい。

5. 木村太郎氏の母音の音響分析

前節までを受け、他の日本語方言でもミンナやミナのミにおいて * /ɪ/ が音韻生存しているかもしれないという仮説を立て、2020 年 1 月初から 3 月末にかけてテレビ放送等でアナウンサー、記者、ジャーナリスト、政治家、

タレントなどの発音を注意深く観察しつつ、録画をブルーレイディスクに保存して録音機で録音したり、YouTube から wav ファイルに変換してダウンロード（以下 DL）保存したりした。その結果、東京では、ジャーナリストの木村太郎氏、政治家の安倍晋三氏、アナウンサーの古舘伊知郎氏、タレントの黒柳徹子氏などにその発音 /ɪ/ [I] が認められた。更に今後、八丈、東京、埼玉、神奈川、岡山、香川、石川などで話者を探し調査票による現地調査をする必要を感じている。

木村太郎氏はテレビ放送「報道 1930」（BS-TBS）で得られた発語のほかに、木村（2016, 2017）という DVD（順に『トランプ後の世界 木村太郎が予言する 5 つの未来』、『トランプ後の世界 第 2 幕 最新情勢 日本、アメリカ、そして世界 2017』）が刊行されていて、統計分析に十分な量の発語が得られたので、1 人目の東京方言話者に選定した。ウェブサイト『Bizコンパス』記事によると、氏は 1938 年、米カリフォルニア州パークレーで生まれ、3 歳のときに日本に帰国して東京・港区の南麻布に移り住み、慶應義塾幼稚舎、慶應義塾高等学校、東海高校編入を経て、慶應義塾大学に入った。その他の情報を見ると、親から上の世代は必ずしも東京出身とは限らないようだが、本人は東京出身でよい。実際に DVD など確認すると、「うまい」を /Nmai/ と発音するなど、古い世代の東京方言の特徴をよく示している。港区南麻布に対して慶應義塾幼稚舎（渋谷区恵比寿）は近隣であり、小学生を終えるまでの重要な言語形成期を東京の所謂「山の手」の中核地域で過ごした。「山の手言葉」は標準語の母体となったことで知られるが、「山の手言葉」自体はれっきとした方言の一種であるから、氏を山の手方言話者あるい

は東京方言話者と見て差し支えない。

話者の資料を用い、「[ミンナ]、[ミ] ナ、ミ [ナ] サン」の「ミ」の発音を録音調査した（資料A；別稿に譲る）。記号を説明する。アクセント表記は標準語において一般的なもので、左側の括弧は句頭の上昇を、右側の括弧は下げ核を表している。セグメントは/miNna, miNNna, mina, minasaN/の4種類で、第一母音が/i/[I] に聞こえる場合は/I/で記している（/I/の音色が顕著でない場合は/i/で記した）。F1、F2（第1、第2ホルマント周波数）の値は小数点以下四捨五入する（以下同様）。F2の平均値は「ミンナ、ミナ、ミナサン」の母音が約1800Hz、それ以外のミの母音が約2200Hzであり、それによって/I/と/i/を書き分けているが、約1800Hzという平均値には/I/と書かれた発音例も寄与している。なお若い世代の標準語母語話者である筆者が「ミンナ」を伸ばして強調する時は「ミーナ」と母音を伸ばすが、木村太郎氏は必ず「ミンナ」と撥音を伸ばしていた（古館伊知郎氏もほぼ同様）。なおガ行鼻濁音は音素/ŋ/で書いてい

るが/gとのミニマルペアを確かめた訳ではなく、語中の音声は[ŋ]で安定しているというだけの意味である（古館伊知郎氏、黒柳徹子氏も同様）。

以下では資料Aで得られた音節ミを/mI/として扱う。つまり資料Aで/mi/と書かれたものも/mI/の一部として扱う。これは強調形における音韻生存を考える上では当然で、通常母音である/i/[i]への揺れを内包する存在として/I/を扱う。/mI/は58例得られたので、/mi, me, ma, mo, mu/も少なくとも50例得られるように注意しながら木村（2016, 2017）を満遍なく用いて録音調査した（図2）。これらの語例は一々示さない（ランダムにサンプリングするので環境条件がバラバラだが、統計が誤差の問題を解決する；以下同様）。音響分析にはpraatとエクセル統計を用いた（有意水準はP < 0.05）。

通常の5母音間では当然有意差が出ているが、一々記さない。ただし/mi, mu/のF1に有意差は無かった。/me, mI/のF2に有意差は無い。/mi, mI/のF1に有意差が出ているが、こ

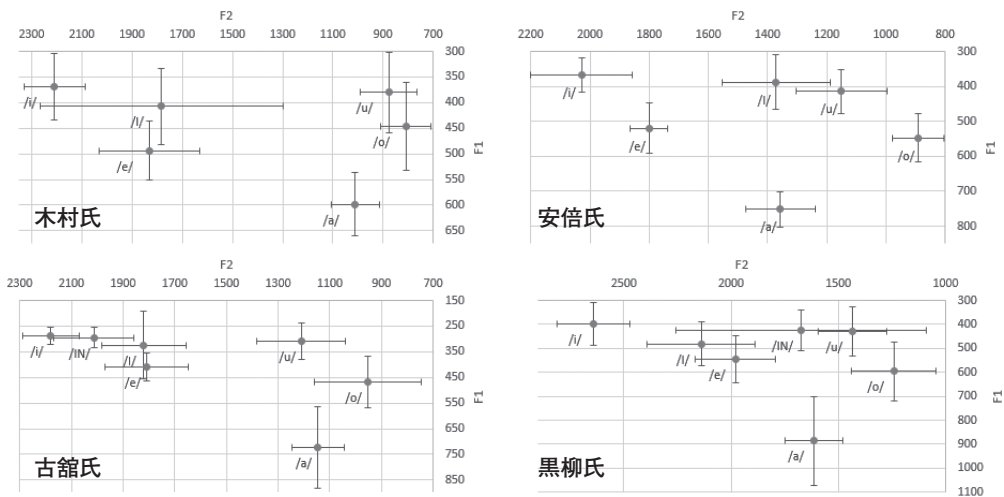


図2 東京方言話者4名の「皆」のミの母音の音価

れは/mI/が基本的には中舌化母音でありつつもゆるみ母音でもあるという性質が現れているものと解釈される。/mi, mI/の違いの重要な点はF2であり、/me, mI/の違いはF1である。以上のことから、*/I/の音韻生存の可能性はある。

また、本節の調査では自然談話を調査したため、「ミンナ」のみならず「ミナ、ミナサン」においても東京方言では/i/[I]を持つと分かった。「ミンナ」が撥音挿入形であるのに対して「ミナ、ミナサン」はそうではなく、一見、強調形とは言えない。しかしながら、「皆」という語彙の持つ意味自体が強調であり、言わば「意味的に強調された語彙」なので、その限りで「ミナ、ミナサン」もまた強調形である（以下同様）。

6. 安倍晋三氏の母音の音響分析

前述の通り、政治家の安倍晋三氏にも/i/[I]の発音が顕著に認められ、「新型コロナウイルス安倍首相記者会見」（NHK：2020年2月29日、同3月14日）、「報道1930」、「新型コロナ対応安倍首相会見」（NHK：2020年3月28日）で統計分析に足る量の発音を録画・録音できたので、標準日本語話者の代表として本節の話者に選定した。

Wikipedia記事などによると、氏は1954年、東京都新宿区で生まれた。両親から上の世代は山口県に連なるが、本人は東京都武蔵野市吉祥寺に位置する成蹊小学校、成蹊中学校・高等学校、成蹊大学を卒業した。地理的には山の手の手すぐ西と言え、方言としては山の手西部方言と言えようが、世代的には標準語である。発話を観察しても標準語から逸脱する点は見られない。個人差としては側音化構音（発音が [I] の構えをとりやすい傾向）が見

られ、会見でも「道民へも」という発語の [d] に [I] の音色が重なっていた。語中のガ行鼻濁音/-g-/-ŋ-/は揺れていて、まだ/-g-/-g~v-/に変化しきっていない中間的な世代と見る。調査した語例から挙げると、鼻濁音は「皆さんが4、申し上げます3、踏まえながら3、万が一2、今後も2、部分が2、ありますが2、申し上げて2、学びながら2、考えて1、今後とも1、説明が1、申し上げたい1、今が1」（27例）で、若い世代の濁音は「ありますが7、ございますが3、進学前2、卒業前2、今が2、皆さんが1、一月まで1、六名が1、しますが1、なりましたが1、申し上げる1、親御さん1、株価が1」（24例）だった。偏りもなく、単純に揺れているが、直前に撥音が来ると鼻濁音で現れやすい。もし生粋の東京方言話者ならば最低でも鼻濁音を完全に保持していて然るべきなので、山の手西部方言の影響下にある標準語話者とするのが妥当である。

話者の資料を用い、「[ミンナ]、ミ [ナ] サン、ミ [ナ] サマ」の「ミ」の発音を録音調査した（資料B；別稿に譲る）。記号を説明する。セグメントは/miNna, minasaN, minasama/の3種類で、第一母音が/i/[I]に聞こえる場合は/I/で記している（/I/の音色が顕著でない場合は/i/で記した）。F2の平均値は「皆」のミが1371Hz、通常のミが2029Hzで、それに従い1700Hzを境に/I/と/i/を書き分けているが、1371Hzという平均値には/i/と書かれた発語例も寄与している。

以下では資料Bで得られた音節ミを/mI/として扱う。つまり資料Bで/mi/と書かれたものも/mI/の一部として扱う。/mI/は96例得られたので、/mi, me, ma, mo, mu/は少なくとも32例得られるように注意しながら録音調査し

た（図2）。それらの語例は一々示さない。音響分析にはpraatとエクセル統計を用いた（有意水準は $P < 0.05$ ）。

ただし資料では/mu/の語例が不足したため、/bu/を19例、/hu/[ϕu] を3例足して合計32例になるようにした。これはいずれの子音も両唇音であり母音への影響に重要な差が出ないと考えた為である。通常の5母音間では当然有意差が出ているが、一々記さない。ただし/me, mo/のF1に有意差は無かった。/ma, mI/のF2に有意差は無い。/mi, mI, mu/のF1に有意差は無い。/mI/は/mi, me, mu/のいずれともF2に有意差があり、/me, mI/のF1に有意差がある。以上のことから、*/I/の音韻生存の可能性はある。木村太郎氏よりも中舌化しているのは幼少期から政界で年寄りと会話する機会が多かったからか。

7. 古館伊知郎氏の母音の音響分析

前述の通り、アナウンサーの古館伊知郎氏にも/i/[I] の発音が顕著に認められ、ラジオ「古館伊知郎のオールナイトニッポンGOLD」（学術目的の部分引用としてYouTubeからwavファイルに変換しDL）で統計分析に足る量の自然談話を取得できたので（2017年2月17日放送分から2020年3月13日放送分まで断続的に取得）、下町方言話者（世代的には下町の標準語話者）の代表として本節の話者に選定した。

テレビ「ファミリーヒストリー」（NHK；2020年3月20日）やWikipedia記事などによると、氏は1954年に生まれた。両親は結婚して北区滝野川に居を構えている。母方の祖父はよそから来たが、母親は下町（北区滝野川）の生まれ育ちで、氏も同様である。父方の祖父はよその出身だが、父親は大連第一中学校

を出ているから、当時の標準語を身につけていそう。氏の発音を観察すると随所に下町方言の特徴が見える。落語の真似をして舌尖ふるえ音ができるだけでなく、自然談話でも語頭・語中で舌尖ふるえ音が現れることがある。「ゼシトモ」（是非とも）、「ハナツツァキ」（鼻っ先）と発語した。

話者の資料を用い、「[ミンナ]、ミ [ナ] マデ、ミ [ナ] サン、ミ [ナ] サマ、ミ [ナゴロシ]」の「ミ」の発音を調査した（資料C；別稿に譲る）。記号を説明する。セグメントは/miNna, miNNna, miRNna, minamade, minasaN, minasama, minajorosi/の7種類で（皆さん、皆様に付く「方（ガタ）」は煩雑になるので捨象している；以下同様）、第一母音が/i/[I]に聞こえる場合は/I/で記している（/I/の音色が顕著でない場合は/i/で記した）。ただし古館伊知郎氏と黒柳徹子氏では撥音挿入形は/IN/（これも一種の省略表記）、非挿入形は/I/で区別して分析することができる（図2）。なお撥音挿入形は/IN/と表示していても計測区間はあくまでも/i/[I]の母音部分である（以下同様）。

以下では資料Cで得られた音節ミを/mI, mIN/として扱う。つまり資料Cで/mi, miN/と書かれたものも/mI, mIN/の一部として扱う。/mI/は63例、/mIN/は273例得られ、/mi, me, ma, mo, mu/は少なくとも50例得られるように調査した（図2）。それらの語例は一々示さない。音響分析にはpraatとエクセル統計を用いた（有意水準は $P < 0.05$ ）。

通常の5母音間では当然有意差が出ているが、一々記さない。/mi, mIN, mI/はF2に有意差がある。/mI, me/はF1に有意差がある。なお/mIN, mI/のF1に有意差があるが、これは中舌化だけでなくゆるみ母音の要素があるか

らではないかと考えられる。以上のことから、*/l/の音韻生存の可能性がある。

8. 黒柳徹子氏の母音の音響分析

前述の通り、タレントの黒柳徹子氏にも/l/ [I] の発音が顕著に認められ、テレビ「徹子の部屋」(学術目的の部分引用としてYouTubeからwavファイルに変換しDL)で統計分析に足る量の自然談話を取得できたので(2004年2月12日放送分から2019年9月18日放送分まで断続的に取得;個人内の基本周波数の変遷を警戒して最近の放送に限定した)、山の手南部方言話者の代表として本節の話者に選定した。

Wikipedia記事などによると、黒柳徹子氏(父方は東京、母方は北海道)は1933年に港区乃木坂で生まれ、大田区北千束町で育ち、トモエ学園(目黒区自由ヶ丘)、香蘭女学校(品川区旗の台)、東洋音楽学校声楽科(目黒区上目黒)を出ている。従って地理的には山の手南部方言となる。発話を観察すると稀に「/Nmaŋa/ (馬が)」のような発音が聞かれるが、これなどは山の手方言の反映と見られる。

話者の資料を用い、「[ミンナ]、[ミ] ナ、ミ [ナ] サン、ミ [ナ] サマ」の「ミ」の発音を調査した(資料D;別稿に譲る)。記号を説明する。セグメントは/miNna, mina, minasaN, minasama/の4種類で、第一母音が/l/[I]に聞こえる場合は/l/で記している(/l/の音色が顕著でない場合は/l/で記した)。ただし撥音挿入形は/IN/, 非挿入形は/l/で区別する(図2)。

以下では資料Dで得られた音節ミを/mI, mIN/として扱う。つまり資料Dで/mi, miN/と書かれたものも/mI, mIN/の一部として扱う。/mI/は97例、/mIN/は144例得られ、/mi, me,

ma, mo, mu/は多くて60例得られるように調査した(図2)。それらの語例は一々示さない。音響分析にはpraatとエクセル統計を用いた(有意水準は $P < 0.05$)。

通常の5母音間では当然有意差が出ているが、一々記さない。/mi, mI, mIN, mu/はF2に有意差がある。/mI, me/はF1、F2に有意差がある。なお/mi, mI/のF1に有意差があり、/mi, mIN/のF1にも $P=0.0492$ で辛うじて有意差があるが、これは中舌化だけでなくゆるみ母音の要素があるからと考えられる。以上のことから、*/l/の音韻生存の可能性がある。/mIN, mI/の位置関係は古館伊知郎氏と黒柳徹子氏で逆転しているが、/mI/の位置が動いている訳ではなく、/mIN/が古館伊知郎氏では/mi/に合流しかかっているのに対し、黒柳徹子氏では明瞭な(パラ言語的に)中舌化した発音が頻繁に見られるからであろう。また、黒柳徹子氏の/mIN/のF2の振れ幅が大きいのは、パラ言語的な性質によるものもあるだろうし、図3の度数分布表を見ると、度数のピークが2つあって、一方は単純に/mu/と同様に発音されていることが分かる。他方のピークだけを考慮すれば図2の/mIN/は/mu/と無駄に重なることなく中舌母音の位置に収まると見てよい。

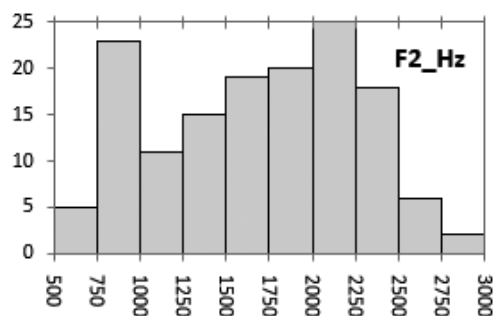


図3 黒柳徹子氏の/mIN/のF2度数分布

9. おわりに—まとめと今後の課題

本稿では先ず、認知集合論における記号生存が「個体愛の受肉」という原理によっても成立していることを論じ、音韻生存の経路が乳幼児期にあるのではないかと指摘した。言語哲学としての認知集合論や一般の記号生存については今後も引き続き研究して行きたい。

続いて、語根「皆」における上代特殊仮名遣イ列乙類母音の音韻生存の可能性を論じた。八丈方言では調査票調査を実施したが、次回以降は実験計画を万全にした上で見込みのある各地の方言で実施して行きたい。コロナ禍で対面調査が難しいため、東京方言では自然談話コーパスに基づく分析を実施したが、当然調査票を用いた対面調査も今後は実施して行く必要がある。コーパス調査にも利点があり、それはデータが共有されているので誰でも簡単に耳で聴いて事実を判断できるという点である。東京や埼玉で*/i/[i]*を持っている人は若い人の中にも少なくないので、周囲の「皆」を是非聴いてみてほしい。

参考文献

- 高山林太郎 (2010) 「母音の甲乙が確認される現代方言の報告(1)～八丈島方言～」国立国語研究所危機方言プロジェクト研究発表会, 立川: 国立国語研究所, 2010年8月1日.
- 高山林太郎 (2014) 「八丈方言の非短母音の比較」『東京大学言語学論集電子版 (eTULIP)』35: e1-e118. 東京: 東京大学言語学研究室.
- 高山林太郎 (2017) 「多型の日本語諸方言の複合動詞の有標アクセント」『東京大学言語学論集電子版 (eTULIP)』38: e119-e321. 東京: 東京大学言語学研究室.
- 高山林太郎 (2018a) 『タッスイのツとは何か』高知:

リーブル出版.

- 高山林太郎 (2018b) 「八丈方言のミンナのミの母音と音韻生存」『第32回日本音声学全国大会予稿集』138-143, 宜野湾: 沖縄国際大学, 2018年9月15日.
- 高山林太郎 (2018c) 「日本列島のふるえ音と吸着音と膨れっ面」『東京大学言語学論集 (TULIP)』40: 307-324. 東京: 東京大学言語学研究室.
- 高山林太郎 (2020) 「記号生存と認知集合論—古い記号が残る理由—」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』20: 1-14. 川口: 埼玉学園大学.
- 高山林太郎 (2021) 「記号論から認知集合論へ—記号としての現実—」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』21: 1-14. 川口: 埼玉学園大学.